

# 進路指導に役立つ教育データ集 6

## 進路の手引き用資料

### 進路学習の指針となる「進路の手引き」

高校3年間、手元に置き、進路について疑問がわいたとき、知りたいことが出てきたとき、これを開けば自分が今、何をどのように調べるべきかが分かる。「進路の手引き」はそんな1冊にしたい。進路に関するあらゆる情報を網羅するデータ集的な冊子にするのも一つの方法だが、今回は、生徒が読んで自ら調べることができる、進路学習の指針となるような「進路の手引き」の作り方を考えたい。「進路の手引き」の中心は、進路を考える上での手順や方法、調べ方などになる。しかし、ただ文章を羅列するだけではなく、適宜要点をまとめたり、間違えやすい項目を表にまとめるなど、見やすくする工夫が必要だ。

今回のデータは大きな特徴をまとめたもので、各大学の詳細は、個別の募集要項などでご確認ください。

### 国公立大 / 分離分割方式

	前期日程	後期日程
試験日	2月25日から	3月12日から
合格発表	3月6日から3月10日まで	3月20日から3月24日まで
募集人員	74,876人('99年度)	28,188人('99年度)
志願倍率	3.7倍('99年度)	8.4倍('99年度)
欠席率	6.1%('99年度)	48.3%('99年度)
センター試験教科数	5教科中心	5教科中心(3教科も多い)
個別試験教科数	1~3教科中心	0~2教科中心
個別試験の内容	主に記述式、論述式	小論文、面接の場合も多い

募集人員、志願倍率、欠席率は文部省調べ。

募集人員の多くを前期日程に配分している国公立大が多い。後期日程の志願倍率は高いが欠席率も高く、実質倍率は半減すると考えてよい。

### 私立大 / 入試方式 1

方式	内容
得意科目重視型	受験生自身が得意科目を申告する方式、得点の高かった科目の配点が自動的に高くなる方式、の2種類がある。
センター試験利用入試	センター試験のみで合否を判定(大学独自の試験は行わない)、センター試験で学力を判定、大学独自の試験は面接や小論文などが中心、大学独自の試験とセンター試験の両方を受験した場合、高得点の方を合否判定に採用、などがある。
地方試験	大学の所在地以外の場所に試験会場を設けて行われる試験。本学試験と地方試験の日程が異なれば、複数回受験できるケースもある。
試験日自由選択制	入試日が2日以上設定されており、それらの中から自由に受験日を選べる制度。日程が重ならなければ複数回受験できるケースが多い。
第2志望制	出願の際に、志望する学部・学科や専攻・コース、夜間や第2部、併設の短大を、第2志望あるいは第3、4志望まで認めている制度。

私立大の場合は、原則として1回の個別試験で合否が決まるが、多くの大学が個性的な学生を求めて、多様な入試方式を採用している。

### 私立大 / 入試方式 2

方式	内容
問題選択型	複数の問題が出題され、試験中に解答する問題を、大学側の指定の数だけ受験生が選べる方式。
小論文重視型	小論文が合否を大きく左右する方式。 学力試験+小論文(小論文の配点が高い)、小論文+面接、小論文のみ、の3種類に分かれる。
自己推薦入試	受験生が自分の特技や資格をアピールし、それを評価することによって合格者を決める推薦入試。公募制推薦と違い、高校長の推薦が不要で、生徒が自由に出願できる。
AO入試	学力だけではなく、特技や資格、志望動機などを含めて、受験生を総合的に評価する。学力試験がなく書類と面接がメイン。
後期試験	前期試験とは別に募集人員枠を確保し、前期日程の合格発表後に試験が行われるため、無駄な受験を省くことができる。多くの大学が3月に設定。

私立大では、試験の内容や判定の基準が異なる方式も多い。得意な分野がある人や志望動機の高い人にとっては有効な手段となる。

# data and career counseling

高校3年間を通して、進路学習の指針となる「進路の手引き」。その中には、要点を分かりやすくまとめた表などを適宜挿入するなど、生徒の進路学習を手助けできる1冊にしたい。そのためには見やすさ、使いやすさもポイントになるだろう。

### 推薦入試の募集要項チェックポイント

要件	チェックポイント
出願条件	推薦入試に出願するには、大学側の定めた条件を満たしていなくてはならない。最も代表的な条件が、評定平均値。公立大の場合は、その地域の住民であることや地元の高校を卒業しているといった条件も見られる。
募集人員	推薦入試は、一般入試に比べて募集人員枠が少ない。どのくらいの人数が合格できるのか、実質倍率(実際に試験を受けた人数を合格者の数で割ったもの)を確認することも重要。
試験日程	特に併願を考えている人は、他の大学の日程と重ならないように要注意。専願の人も今後の準備や学習計画のために要チェック。
選抜方法	選抜方法は大学によって異なるので、受験する大学がどのような方法で推薦入試を実施するのかを要確認。書類の他に、面接や小論文が課せられる場合が多い。
併願の可否	公募制推薦の場合は、併願が認められるケースが増えている。指定校制推薦の場合は、併願や合格後の辞退は難しいので要注意。

指定校制推薦(指定校の人数枠があると公募制推薦(学校長の推薦があれば出願可)以外にも、最近はAO入試を含めた自己推薦入試(推薦者不要)が増加。

### 推薦入試の調査書内容

調査項目	記載内容
出欠の記録	3年生1学期までの授業日数と出欠日数を記録。
学習の記録	3年生1学期までに履修した教科・科目の単位数とその5段階評価を明記。
各教科の評定平均値	各教科ごとに学習した科目の5段階評価を合計し、それを科目数で割ったもの。
全体の評定平均値	高校3年間に学習した全教科・科目の評定平均値を合計し、それを全科目数で割ったもの。
学習成績概評	全体の評定平均値をA~Eの5段階評価したものを。A=5.0~4.3、B=4.2~3.5、C=3.4~2.7、D=2.6~1.9、E=1.8以下。
特別活動の記録	部活動、生徒会活動、学校行事など、勉強以外で特に尽力したことを明記。
指導上参考となる諸事項	課外活動、ボランティアなどの学外活動や、性格、特技、取得した資格など、学校外での優れた箇所を明記。
備考	大学側の希望で、本人の志望学部・学科に対する能力や適性について、学校長が特に推薦できる箇所などを明記。

高校3年間の成績をはじめ、特別活動や学外活動、適性などが記入される。推薦入試では、この他に「志望理由書」などが求められる。

### ●進路の手引きを作るための四つのポイント

- 資料集ではなく、進路学習の教科書となるものを作る**  
この1冊を見れば生徒は何も調べる必要がない、というものはなく、これを見ながら生徒が調べていける、そんな「進路の手引き」を作りたい。大切なのは、あくまで生徒自身が考え調べることに。を手助けする冊子にしたい。
- 要点をまとめるなど、見やすさも考慮**  
進路を考える上での手順や方法調べ方などを、ただ文章を羅列して説明しただけでは、字が多く読みづらいと感じる生徒もいるだろう。3年間使ってもとつためには、見やすさも大切である。考える順序をチャートにしたり、間違えやすい項目については表にして比較するなどしてはどうか。
- イメージを膨らませるために具体例を挙げる**  
興味のある職業について調べてみよう、と書いてもどんな職業があるのか生徒は分からないかも知れない。一例として、この分野に興味のある人ならこの職業と具体例を提示しておけば、そこからイメージが膨らんでいくだろう。
- 進路に関する資料のある場所を提示**  
進路指導室内の配置図などを「進路の手引き」に載せておけば、資料がどこにあるのかを知ることができるので、生徒が自主的に調べることができるだろう。

課外活動	内容
生徒会活動	生徒会活動で会長や副会長を務め、リーダーシップを発揮したなどの他、全校的な学校行事(文化祭、体育祭など)での実行委員長も対象。他の役員を含む大学もある。
スポーツ	全国レベルまたは都道府県レベルの個人または団体競技で優秀な成績を修めた者という条件が一般的。競技種目や入賞順位を指定する大学もある。
文化・芸術活動	スポーツと同じように、都道府県レベル以上のコンクールなどで優秀な成績を修めた者(入賞者)が一般的。
ボランティア・社会活動	多くの場合「長期に渡って……」という条件が付いている。ボランティア団体やサークルに所属して成果を上げていれば有利。
留学経験	公募制推薦や自己推薦の出願資格として、留学経験を認めている大学がある。現在の実施大学数はそれほど多くないが、今後増える傾向にある。

課外活動では、生徒会活動や部活動の他に、学外での社会奉仕活動が認められる場合が多い。これらはいづれも長い期間に渡っての活動が必要になる。

### 推薦入試で優遇される資格・特技

資格・特技	内容
英検	準2級か2級以上を評価する大学が多く、準1級以上の大学もある。準1級以上に合格していればかなり有利。
TOEFL	出願資格や合格判定時に使用される。一般的には400~450点以上、難関大や外国語学部などは500点以上が多い。
情報処理技術者	工学部や理工学部はもちろんのこと、経済系学部で第2種以上を出願資格として認めている大学が多い。
珠算検定	経営・商・工学部を中心に、出願資格として認めている大学がある。評価される級や段は大学によって異なる。
簿記検定	経済系学部の出願資格や合格判定の際に優遇する大学が多い。日商簿記は2級以上、全商簿記は1級が一般的。

資格・特技では、大学が求める能力に応じて優遇されることが多い。最近は一probe検定や漢字検定を認めるような例も増えている。